

オランダの地中海交易について

—J.I. Israel の所説に寄せて—

中 沢 勝 三

I はじめに

17世紀オランダは形成されつつある「世界経済」——I.ウォーラーステインの表現を借りれば「近代世界システム」⁽¹⁾——の結節点として当時の西ヨーロッパを中心として、アフリカ、アメリカそしてアジアのそれぞれ一部分を包み込む不完全ながらもある程度の統合性を持ち始めた「世界経済」の中核国家の一つとして繁栄し、アムステルダムはその中心に位置して国際経済の文字通り結節地として機能した。ところでこの17世紀を「オランダの時代」と考えることに大きな異論がないと思われるものの、その表現に込められる意味内容はそれほど単純ではない。そもそもときとして論じられる「オランダの覇権」自体、考え様によっては歴史の「偶然」と考えられる側面もあることは事実である。つまりイギリスの内戦期——「市民革命」——の「重商主義」的⁽²⁾ 対外政策の脆弱さによる覇権争奪戦への事実上の不参加によって西ヨーロッパにいわば覇権国家の不在、ないし空隙という局面が現出した。また、経済史の分野についてみても、この17世紀という時代が大きな分水嶺に位置しているがために、その位置付けと評価が大きく別れ易いのである。それだけではない。この問題を論ずる歴史家の属する国籍、時代状況、その歴史観によって捉え方が大きく左右されてくる。その好個の例としてあげられるのがここで取り上げるオランダのジブラルタル海峡の通過交易ではなかるうか。本稿では、J.I. イズラエルの「オランダ海峡通過交易」⁽³⁾ と題する論文を取り上げ、その内容を紹介する形でこのオランダの商業覇権の問題に接近してみたい⁽⁴⁾。

(1) I. Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist agriculture and the origins of the European world-economy in the sixteenth century*, New York, 1974 (川北総訳「近代世界システム」I・II, 岩波書店, 1981年)。

(2) この表現については、柴田三千雄『近代世界と民衆運動』, 岩波書店, 1983年, 第1章の3参照。

(3) Jonathan I. Israel, "The Phases of the Dutch Straatvaart (1590-1713)—A Chapter in the Economic History of the Mediterranean—" in: *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 99 (1986), pp. 1-30. 彼には次の業績がある。*The Dutch Republic and the Hispanic World, 1606-1661*, Oxford 1982.

(4) オランダの覇権については筆者もウォーラーステインの説を下敷きにして論じたことがある。「『オランダの覇権』をめぐって」, 『弘前大学経済研究』8 (1985)。

II 論文骨子と 1621 年までについて

イスラエルの論文は「オランダ海峡通過交易の諸局面（1590年—1713年）——地中海経済史の1章——」という表題をもつが、この「海峡通過」という場合の「海峡」とはジブラルタル海峡を指す。ところでこのジブラルタル海峡をめぐる海上交易の帰趨は、16・17世紀の「商業革命」の時代において、「世界経済」の重心が地中海地域——そしてバルト海域——から大西洋世界に決定的に転移しつつある時代であっただけにきわめて大きな意味を持つものといえる。具体的にいえば、本格的に到来した大西洋世界経済の担い手となっていくオランダ、イギリス、そしてフランスの諸勢力がこの海峡を突破して地中海世界にいわば進入していくことは、それまで地中海に限らずヨーロッパ的視野で活躍していたヴェネツィア、ジェノヴァなどのイタリアの海上商業勢力が「世界経済」の舞台はもとよりとして、自らの地盤であった地中海交易の覇権まで失っていくことを意味するからである。

ではこれからイスラエルの所説を紹介していこう。彼によって研究史をごくおおづかみに整理すると次のようになる。オランダ共和国は「世界経済」全体に対して16世紀末から18世紀の中頃まで大きな優位を保った⁽⁵⁾。しかし、オランダの持つ経済的影響力は地域的に見て不均一性を持つものであった。つまり、北部ロシアや東インドの諸島では圧倒的な支配力を持ったが、他の地域ではそれほど目立った力を持つものではなかった。オランダ人が余所より勢力を持たなかった地域の一つが地中海であった。オランダが世界商業の覇権をもった時代の大部分においてオランダは地中海ではイギリスやフランスと競合しつつ2、ないし3番目の地位に甘んじなければならなかった、と。

イスラエルは、オランダの地中海交易についてのこの通説的見解に本論文において真正面から挑戦していく。

研究史上オランダの海峡通過交易について魅惑的な研究のスタートを切ったのはファン・ディレンであった。ファン・ディレンによって提示されたオランダ経済史像は1590年から1620年にかけて活況を呈したあと、1645年まで停滞し、その後1660年代初めまで再び繁栄した。そしてそれ以後オランダのジブラルタル海峡越えの交易は確実に衰退していくというものであった。このファン・ディレンの把握にイスラエルは修正を迫るだけでなく、彼以上に大きな影響を持つ英・仏の歴史家——具体的にはラルフ・デーヴィスとフェルナン・ブローデル——の見解を葬送すべきだといっているのである。つまりイスラエルによれば、イギリス史家は地中海交易へのオランダの関与を著しく過小評価しがちであった。その代表格がデーヴィスであり、彼は「イギリス人がやったことはヴェネツィアやフランスの交易を奪取する以上のことであって、彼らはこれら二国の商人が以前に販売したより以上の商品をトル

(5) ウォーラーズテインは注(1)であげた著書の続作でオランダの本来的覇権の時期を1625年から1675年としている。『The Modern World-System, II: Mercantilism and the consolidation of the European world-economy, 1600-1750』, New York, 1980, p. 20。なお、新著で彼はオランダの覇権の時期を1620年から1650年としている。『The Politics of the World-Economy. The states, the movements and the civilizations』, Cambridge-Paris, 1984, p. 17。

コで売った」(p. 3)⁽⁶⁾と主張した。こうしてオランダ人はレヴァントでは完全にマージナルな要因として把握されたのである。これに対してブローデルは1590年以後1650年頃までオランダの海運上の優位を認める。そして地中海経済の発展という彼独自の考え方にあわせてオランダの役割を説明する。彼によれば重要なのは嵩荷、とりわけ穀物取引こそ地中海商業力の均衡を決定する要因であり、オランダは地中海への穀物輸送を維持したかぎりで評価される。ブローデルにとって地中海経済に対する北ヨーロッパ人の優越性は1590年に始まるイタリア向け穀物の輸送とともに始まる。このイタリア市場での穀物価格の上昇に引き寄せられて北欧の船団がジブラルタルを越えたと把握されている。

イスラエルの批判は、まず第一に地中海における交易支配の鍵が穀物輸送にあるという考え方に向けられる。そしてオランダの穀物交易における卓越性がオランダの第一の地位を与えたという見解に向けられる。

では、イスラエルによればオランダの地中海交易の意義と興隆はどのように考えられるのか。彼もバルト海穀物の地中海への輸送を否定しないが、国際的な競争の主要な焦点となったのは穀物交易ではなく、イギリス人が「豊かな交易」と表現したイタリアの絹製品や他の奢侈品と繊維製品、香料、銀との交換をめぐって生じたと断定している(レヴァント——近東——においてはバルト海の穀物は何らの意義も持つものでなかった)。

イスラエルはオランダの地中海交易を次の四つの時期区分を使って説明する。第1段階(1590年—1607年)は穀物交易以外は停滞した時期、第2段階(1607年—1621年)は拡大と多様化の時代、第3段階(1621年—1645年)は沈滞と収縮の時期、第4段階(1645年—1688年)最盛期、そして最後に第5段階(1688年—1713年)を劇的な収縮の時期として把握する。この5段階を時期的に区分する目安は、もとよりオランダの地中海交易の内容と構造の変化に求めているのだが、イスラエルにおいて極めて特徴的なのは以上の時期区分から察せられるように、政治的・軍事的要因を重視していることである。つまり1607年はオランダ・スペインの休戦の年(1609年に講和成立)であり、1621年はこの講和の期限が満了した年——オランダ・スペインの戦争の再開の年——、1645年はヴェネツィア・トルコ戦争勃発、1688年は翌89年に9年戦争(98年まで続く——フランスとの戦争)の始まった年、そして1713年は周知のようにスペイン継承戦争終結の年である。

こうしたイスラエルの捉え方は交易構造の変化という視点からなされたものであるが、F.ブローデルに対する批判的見地からなされたものである。つまり、ブローデルは、「長期的トレンド」を重視し、「長期間にわたって生じた基礎的な素材の必要、要因、諸力によって形成される」移行を問題とするが(p. 7)、イスラエルは、「それが事実には適合しない場合は受け入れられない」と言明している。具体的に言えば、1607年から1621年のオランダとスペインの間の休戦、そしてそれに前後する両者の戦争、それによる通商停止の取引に及ぼす影響の評価が問題となる。ブローデルが「スペインの通商停止が有効さを持たない」と主張

(6) 以下本論の文の引用、ないし参照ページをこのように指示する。

するのに対して、イスラエルは、ファン・ディレンと同じくこの説を批判する。彼の立場は一応実証的データに基づいている（一応というのはイスラエルも認めるようにこの問題について時系列的・包括的データが得られないからである）。イスラエルは1598年から1602年にスペインとオランダの海上交易がそれ以前に比して70から80パーセント減少し、同交易の「崩壊」さえ論じている（史料はアムステルダムの傭船契約）。ブローデルとの相違はたんに交易の推移の捉え方だけに留まらない。ブローデルは、1590年代から1650年までオランダの地中海交易に一つの基本的な型があったと考えるが、イスラエルは、1606-09年にオランダの地中海交易の急上昇が始まるとともにこの海峡通過交易の「構造」が根底から変化したという。内容、形態、組織の全てが転換した。「1607年4月のオランダ、スペインの休戦とそれに続く通商停止の廃止は、オランダ人が地中海に航行することを遥かに一層安全にし、彼らをスペインとポルトガルの港に再び受け入れさせ、そしてオランダ人が初めて、西地中海の鍵となる中継交易である（イベリア）半島とイタリアとの間の中継交易に大規模に参加することを可能ならしめた」（p.7）。そして「オランダ人はカスティリヤの羊毛、ヴァレンシアの塩、ポルトガルの砂糖をジェノヴァ、リヴォルノ、ヴェネツィアに、またプリアの油やシチリアの穀物と塩の主要な運搬者であった」（*ibid.*）という。とはいえ、この第2段階においてはヴェネツィアなどのイタリア商人も活動しており、オランダが地中海交易の覇権を持っていたとはいえないとも言明している。

休戦期間中の変化は、しかしながら以上の変化に留まらなかった。イスラエルが最も重要なものとしてあげるのがオランダのスペイン銀への接近であり、これがシチリア以東へのオランダ交易を促進させたという。さらに1609年頃までには香料について、「地中海市場全体が主にオランダから、そして遥かに少ない程度ではあるがイギリスとポルトガルから供給されるようになった」（p.9）。銀と香料を手にしてオランダの地中海交易は大きく飛躍した。オランダは、近東から木綿や綿製品を持ち込み、さらにレヴァント交易の最も価値ある環であったペルシアの原料絹交易に食い込んでいく。イスラエルは次のようなデータを挙げている。1615年9月からの16カ月に85隻のオランダ船がヴェネツィアに来航したが、1616年4月までの43隻についてみるとバルト海の穀物を積んだ船は1隻もなく、しかもその出港地はセヴィーリャ7隻、アリカンテ5隻、クレタ及び他のヴェネツィア領5隻、キプロス2隻というように、ホルントから魚、香料、タールを運ぶ船に混じって、地中海で多様な中継交易に従事している様子をはっきりと看取されるという。オランダ船はキプロスの綿花をヴェネツィアに運ぶとともに、これをネーデルラントとドイツで分配するべくアムステルダムにも運んだのである。1614年には、10隻を下らないオランダ船がこの綿花をキプロスで積み込んだという。

Ⅲ 1621年以後について

次の第3段階（1621-1645年）に入ってオランダの地中海交易は大きく収縮する。1621

年4月にスペインがオランダの船舶と船荷に対する追放令を出し、地中海でのオランダの中継交易が麻痺した。また、これによってオランダはスペインから貴重な銀を獲得することが出来なくなった。このスペインの通商停止の影響は甚大なものであっただけでなく、持続的なものでもあった。とはいえ、オランダは護衛船団を組織することによってジブラルタル海峡の通過交易を続けることは出来た。だが、この護衛費用がオランダのそれまで低廉であった運賃と保険料を劇的に引き上げたのである。1621年にバルト海からイタリアへの穀物輸送運賃は2倍になった。こうして第2段階におけるオランダのイギリスに対する海運コストの優位は、この第3段階において逆転したのである。とくに近東へのオランダ交易は事実上崩壊した。オランダ東インド会社がペルシアの絹のかなりの部分をアフリカ回航ルートを使って運んだことがその地中海交易を縮小させることにつながった。1630年の見積もりとしてホラントに毎年到着する約1,500梱の原料絹のうち、約800がアフリカ回航ルートを用い、400がモスクワ、アルハンゲル経由であり、わずか300が地中海航路を使ったという。

しかしこのオランダの地中海交易の復活は第2段階の繰り返しではなかった。この間、オランダの地中海交易の衰退局面の間隙を突いたのはイギリス、フランス、そしてヴェネツィアであった。とりわけヴェネツィア交易の復活は目覚ましかった。だが、それも1645年のクレタ島をめぐるトルコとヴェネツィアの戦争勃発がヴェネツィアにとって大きく災いすることになる。また1647年にオランダがスペインと講和したことがオランダの地中海への運賃と保険料を劇的に下落させた。こうして1645-7年に地中海交易に大きな構造変化が生じた。オランダのレヴァント交易が復活した（1645年-1688年の第4段階）。「これはオランダの地中海交易における最も繁栄する時代の開始であり、1680年代末まで続くものであった」（p. 17）。この二つの段階においては、「オランダの地中海交易の構造上、すなわち形態、組織の面で大きな相違が生じていた」（*ibid.*）。その最も大きな相違は交易品目におけるオランダの工業製品の有無であった。つまり、第2段階においては、「オランダ人はいかなる量であれ彼ら自身の工業製品を販売することが出来なかったのであり、また（木綿を別とすると）地中海地域からの原料の主要な消費者でなかったのがきわめて特徴的であった。」（*ibid.*）。

しかし第4段階に入って「全てが変化した。1645年以後になると、オランダ共和国は工業製品の生産者として国際的な次元でかつてより遥かに強く立ち現れた。」（p. 18）。イשראלはオランダが工業強国としてピークに達したのは17世紀後半であったとする。いまや、「フランドルの亜麻がハールレムで漂白されるようになり、ホラントからイタリアへ船で運ばれるようになった。そして、イタリアへ輸出されるオランダの最も重要な工業製品としていまや亜麻がサーイ織と競合するようになったことは疑いない」というのである（*ibid.*）。そしてここでとりわけて重要な意味を持つのは「オランダがいまやスペイン羊毛を購入し船積みすることでイギリス人を完全に追い越すことに成功した」ことだという（*ibid.*）。レイデンがラーケン織のヨーロッパの主要な生産者となったことが、レヴァントでの役割の拡大を説明する鍵だとする。年によってはレイデンの生産の3分の1がレヴァントに向けられた。

「1650年後になるとレイデンの市長は、トルコこそが彼らの都市の繁栄と福利にとって至高の重要性を持つということに常に認識していた」(ibid.)。スペイン羊毛で作られた高品質のウール織物こそ16世紀と17世紀始めヴェネツィアのレヴァント交易の卓越性の基礎となったものであるが、イスラエルは、それと「丁度同じ様にホルントの地中海交易がその頂点にあった1647年から1688年にそれはレヴァントでの支配における新しいオランダの攻撃の基礎となった」という(p.18)。

もっとも、イギリスもまたトルコ戦争期におけるヴェネツィア毛織物工業の崩壊から利益を得た。1630年代に比べて1660年代のイギリス毛織物のレヴァント向け輸出は約2倍に上昇している。そしてイスラエルは、この17世紀中葉のイギリスのレヴァント向け毛織物輸出の目覚ましい強化は完全にヴェネツィアとフランスの犠牲によって達成されたものだとしている。「ラルフ・デーヴィスはイギリスがオランダをも侵食しつつあったと考える点で間違っている」という(p.19)。イスラエルは、17世紀第3四半世紀において、レイデン・ラーケン織のスムルナ——そこに1651年オランダ商館が再建された——と、アレppoへの輸出高は年に約6,000反に昇ったという。そしてこれはイギリスのオスマン帝国領への毛織物輸出のほぼ半分に相当する量であったとする。さらに著者は、オランダ製品がイギリスのものよりも高価な原料で作られ、より高価な高級品であったことを想起させる。「1645年から1690年代まではトルコ人によって高く評価された西方の製品はオランダの毛織物であってイギリス製品でなかったのがレヴァントでの商業活動の動向であった」(p.19)と言い切る。こうして著者は、「オランダ海峡通過交易の最も成功した段階、1645年から1688年までにおいて、トルコへ輸出されたオランダ毛織物の価値はイギリス毛織物の価値の半分から3分の2に相当するとある程度の確信を持って断言することが出来る」という(ibid.)。とはいえ少なくともこの数字だけからオランダの優位を云々出来ないが、イスラエルは、この他に、陸路ヴェネツィアやアンコーナを経てトルコ領へ向かったラーケン織の存在を指摘する。さらに加えてオランダのイタリア・トルコ双方への胡椒、香料交易、これまたオランダ人によるスペイン銀交易の流れを想起させる。イギリスもまたトルコへの銀輸出を行ったが、この銀の多くはホルントで鑄造された銀貨であった。イスラエルはこうして、「全てを考慮した上でヴェネツィアとアンコーナを経由する活発な通過交易(a lively transit trade)を持っていたのはオランダ人であってイギリス人ではなかった。ラルフ・デーヴィスの「イギリスは17世紀中葉の数十年にわたってトルコとの最大の西ヨーロッパ交易の担い手であった」という主張を受け入れる根拠がないのはもとよりとして、この時期イギリスのレヴァント交易がオランダを越えていたと考える根拠もないと思われる」(p.20)というのである。

イスラエルによれば第5段階(1688年-1713年)はオランダ地中海交易の衰退局面と捉えられる。そしてこの衰退の原因としてあげられる最も重要な要因は、1688年に始まる9年戦争と、とりわけフランスの Colbert による重商主義的政策、わけてもフランス毛織物工業の成長によるものであった。

IV まとめ

以上 I. J. イズラエルの説くオランダのジブラルタル海峡通過交易の経済的推移についてごく大まかに見てきた。ここではイズラエルの提起したオランダ商業覇権の把握について少しく検討を加えておきたい。

本論文の提起する問題はオランダの海峡通過交易という近代ヨーロッパ経済史の個別問題に係わるものではあるが、当時オランダ海運がヨーロッパの海運に占める位置が甚だ大きかったために、その射程はきわめて大きなものとなる。具体的にいえば、オランダ商業、ないしオランダ海運業の構造上の位置づけいかによって、とりわけ 17 世紀に本格化してくるイギリスとフランスの角逐——通常これはオランダの没落とともに近代史における窮極の覇権争奪として把握される——いい換れば世界経済の覇権をめぐる闘いの把握の仕方が大きく変わってくる可能性がある。それは単にオランダの没落の時期設定がいつであったか、従ってイギリス・フランス間の覇権争奪の本格化がいつであったか、という点に留まるものではない。もっと大きく覇権構造の理解の仕方にまで係わってくるといえよう。

この論文の特徴をあげると、第 1 にすぐれて論争的な性格を持っていることである。英仏のラルフ・デーヴィスやフェルナン・ブローデルといった巨匠に呵責のない批判を浴びせている。19 世紀以後の覇権国家として世界をリードし、経済、政治はもとよりとして文化でも大きな影響力を持った英仏両国が歴史学でも世界の学界を主導した側面は理解できる。この両国の史学によって生み出され、流布されてきた近代世界史像に呪縛されているわれわれの歴史構想力が今日試されていると——いいのかもしれないが。具体的には、英仏の覇権角逐に先立つオランダの覇権の持った射程の大きさ——決して私は覇権国家にのみ歴史の原動力を求めないが、オランダと並んで 16 世紀のポルトガルやスペインについてもいいところであるが——をわれわれはややもすれば過小評価しがちなかもしれない。

第 2 に、第 1 の点と関係することであるが、イズラエルの批判は彼自身によるオランダ経済史、とくにその商業的覇権の歴史的・構造的な新たな把握の提起につながっていく。もとより小論の I の部分で指摘したように、この問題を扱う際になお統計史料が欠けている部分が少なくなくその意味でこれからの研究の進展に待つところが大きいといわねばならない。そして II において見てきたようにイズラエルのオランダ地中海交易の把握は、四つの段階を設定し、しかもきわめて具体的にその変遷を辿る。第 2 の段階（1607—1621 年）と第 4 の段階（1645—1688 年）の繁栄した時代の構造分析はこの論文のまさに白眉と——いい部分である。ひとしく繁栄を論じながらも、双方の時期に交易構造上の転換があったといい、オランダの地中海交易はこれまで主張されてきたようなバルト海—地中海の穀物交易を軸に展開したのではなく、最盛期（17 世紀後半）においては、その軸はオランダ工業製品、わけでもレイデン毛織物の輸出であったという条りは魅力的な捉え方といえる。とはいえ、それだけ刺激的なタッチで描かれているだけに、その叙述に惑わされてはならないであろう。

本論文の問題点として考えられるのはわが国オランダ経済史研究を念頭におくとき、オラ

ンダ経済の把握の仕方に係わってくる。つまり、つとに「中継貿易」の側面が強いと認識されているオランダ国際商業とレイデン毛織物工業に代表される「加工工業」の工業双方の係わりについてであって、この点イスラエルの把握にはとくに新鮮味を感じさせるものが見当たらない。今後この研究史を踏まえた新たなオランダ経済史像の模索を地道に行っていくことが大きな課題となってくるであろう。

« RÉSUMÉ »

ON THE MEDITERRANEAN TRADE OF THE NETHERLANDS
IN CONNECTION WITH J.I. ISRAEL,
THE PHASES OF THE DUTCH STRAATVAART (1590-1713)

Katsumi NAKAZAWA

J.I. Israel published an article on the Dutch Mediterranean trade from the end of the sixteenth to the early eighteenth century in *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 99 (1986), criticizing the tendency to minimize the Dutch role in the Mediterranean trade. British historians tend to underestimate the Dutch involvement in this trade. Israel proposed five phases in the development of the Dutch Mediterranean trade corresponding to 1590-1607, 1607-1621, 1621-1645, 1645-1688, and 1688-1713.

Throughout the second phase (1607-1621), the Dutch were the principal carriers of Castilian wool, Valencian salt, and Portuguese sugar to Genoa, Venice, and also of Sicilian grain and salt, that is, the most important carrying traders in the western Mediterranean commerce. After the third phase (1621-1645), when the Dutch *straatvaart* slumped, the Dutch Republic emerged as a stronger force in the international arena as a producer of industrial goods, especially Leiden's woollen cloth. In the second half of the seventeenth century, the Dutch reached the peak of their success as an industrial power in early modern times. This changed the nature of Dutch trade with the Mediterranean world. A high proportion of Leiden's total output, in some years as much as a third, was destined for the Levant in the eastern Mediterranean.

Israel asserts, "what the evidence does show is a highly complex evolution through five phases, phases not just of expansion and contraction, but in which the structure of the *straatvaart* is each time transformed".